

神の経済学

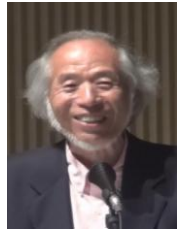
―日銀の闇を切る―

与国秀行

第1版

経済学のタブー、お金とは何か？

山口薫氏は元同志社大学教授であり、世界のトップレベルのカリフォルニア大学バークレー校において、ノーベル経済学者ジェラルド・ドブ



ルー（1983）、ジョージ・アカロフ

（2001）などから経済学を学んできました。しかし彼曰く、現在の最先端の経済学においても、通貨発行権を持つ中央銀行が民間銀行であ



る、ということは学ばないと言います。また、彼とまったく同様のことを、後に紹介するドイツのエコノミストで、イギリスのサウサンプトン大学の経済学教授リチャード・ウエルナー氏も述べております。参考書籍『公共貨幣』

実のところ、日銀、FRB、ECBなどの世界の中央銀行

の**仕事とは**、お金を**“無”**から創造し、印刷、流通、管理することでありますが、しかしその事実については、経済学では触れず、タブーとされてきたのです。

今から約250年前、アダム・スミスより始まった経済学、そして1800年代にはマルクス経済学が打ち立てられ、ジョン・ケインズがさらに経済学を盛り上げて

きましたが、しかし250年間、経済学は、「お金とは何か？」ということを、探究してこなかった、という驚愕の事実が今、ようやく明らかになりました。

山口薫氏は、経済学のタブーを切り裂いて、中央銀行と通貨発行権に関して述べ始めると、同志社大学を解雇されてしまいました。

お金を創っているのは市中銀行だった！

実は実際にお金を企業などに融資・貸し出すことで、“無”からお金を創っているのは、みずほ、三井住友、東京三菱UFJ、りそななどの市中銀行です。市中銀行の**この仕事のことを「信用創造」と言います。**

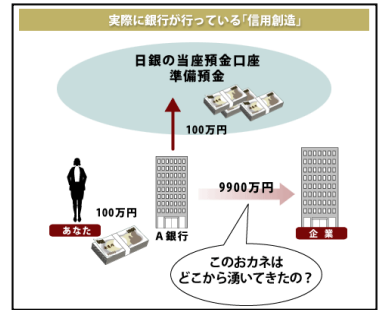
「信用創造」、この言葉は、現在の経済学に登場しない、未来の新たな経済学上、とても重要な用語です。ですから、ぜひこの言葉を覚えてください。

たとえばもしも貴方が壱万円札を百枚、つまり現金で100万円を持っていたとして、それを市中銀行に預けたとします。すると市中銀行は法律によって義務づけられているために、その100万円の一定比率のお金を目銀に預けなければなりません。この比率を**準備預金率**と言いますが、仮にこれが1%であったとすると、銀行の

手元には99万円が残ります。そして銀行はこれを誰かに貸し出します。これが**信用創造**です。そしてその誰かが、貴方にその99万円を支払ったとします。これで貴方は銀行に100万円を預けており、手元には99万円を持っています。つまり合計199万円です。しかし現金として存在しているのは1万円札百枚、100万円だけで99万円は信用創造によって創られたのです。そしてまた再び、貴方がその99万円を銀行に預けたとします。するとまた銀行は法律に従って、準備預金率の1%、9900円を日銀に預けて、そしてまたこのお金を誰かに貸し出して、**信用創造**を行ったとします。

すると現実にあるお金は、壹万円札100枚しか無いにも関わらず、9900万円を創り出すことができるのです。これが現在の経済学には登場しない**信用創造**であり、実は市中銀行が**ボタン一つで**、預金通帳に「〇〇円」と書き込むだけでお金は生み出されいたのです。

車を買う時、家を買う時、会社を始める時、事業を拡



大する時などは、人々は銀行から、何百万円、何千万円、さらには何十、何百億円という膨大なお金を銀行から借りるわけですが、ではその時、そのお金の現物を実際に見た人がいるかというと、なかなかいません。なぜならただ預金通帳に「〇〇円」と書き込まれ、そしてまたその数字上のお金が、どこかの銀行口座へと動いていつて、預金通帳に書き込まれていくだけで、十分に支払いが完了するからです。

市中銀行は**信用創造**というカタチで、実際に現物としては存在しないお金を「無」からボタン一つで数字上、創りだすことができます。そしてこの**信用創造**を管理しているのが、日銀やFRBなどの**民間の中央銀行**なのです。

お金の生死を管理するのは日銀

このように現在の経済学における未知な領域、**信用創造**について考えをめぐらせていくと、「**お金**」という存在が実はバーチャルな存在であった」という驚愕の事実が浮かび上がってまいります。たとえば2017年で考えてみますと、実際に現金として存在するお金は、わずか約95兆円ですが、しかし銀行等に預けられているお金は約1300兆円もあるのです。(※M3)

では、お金はいつ生まれ、いつ消えるのでしょうか？
たとえば水は雲となり、雨となって空から地上に降り注ぎます。そしてその雨は、森の木々、木の葉をくぐり抜けて雫となり、川に入り、魚たちを生かしめ、やがて大海原にたどり着き、そして様々な生命の源となります。また海水は日の光を浴びて、熱せられ、蒸発し、雲となり、そして再び雨となります。

水にもし転生輪廻、生まれ変わりがあるとするならば、水の生と死は雨となって降り注ぐ時、そして蒸発して雲となる時と言えるかもしれません。では、お金はいつ生まれ、いつ死んでいくのでしょうか。水の生死があると仮定するならば、お金に生死があっても不思議ではありません。

お金が生まれる時、その一つは、日銀などの中央銀行がお金を印刷する時ですが、そのみならず市中銀行が企業や個人に貸し出す時に、**信用創造**というカタチでもお金は生まれ、そして返済する時にお金は死んでいたのです。これも既存の経済学ではまったく教えられないことのないことです。銀行が**信用創造**することによって、現物としては存在しないお金が数字上、生まれるわけですが、実はそのお金を返済することによって、

その数字上のお金は消えていたわけです。

そしてすでに述べたように、そのお金の生死にも値する**信用創造**を管理しているところが、実は中央銀行・日銀なわけです。日銀・中央銀行の仕事、それは通貨の印刷・発行であるのみならず、**信用統制**であり、**信用配分**という**通貨の管理**でもあったわけです。

家庭や企業のお金のやり取りの大半が、数字上のお金を、銀行を通じてボタン操作によって送金、振込、引き落としで行っているように、実は銀行間のやり取りも日銀を通じての決済であり、1日あたり、日本のGDPの七割にあたる300兆円ものお金がやり取りが日銀でされているのです。

窓口指導という日銀の影の日本支配

中央銀行・日銀が、市中銀行の**信用創造**を管理、統制し、配分を行っており、これ「**窓口指導**」と言い、1991年まで積極的に行っていました。つまり日銀のセントラルバンカーたちは、「**窓口指導**」として、**信用統制**と**信用配分**を行ってきたわけです。

国家と企業の血液である「お金」の蛇口は、市中銀行にあり、さらに市中銀行にお金を流すその奥の蛇口が中央銀

行・日銀にあったわけです。

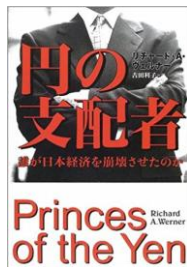
たとえば戦時中、日銀は「窓口指導」として、市中銀行から融資を受けるそれぞれの企業を3つの部門に分類しました。A部門は融資を受ける優先度の高い軍需産業、B部門は中程度の優先度の企業、C部門は贅沢品生産者で融資を受けることは困難な企業です。戦時中、贅沢品に相当するピアノを生産していたヤマハは、融資を受けることが困難なC部門に入りました。そこでヤマハは生き残りをかけて、金属加工技術を駆使して、プロペラやバイクを生産しました。だから今もヤマハはピアノとバイクという異なる分野に事業を展開しているわけです。

日銀が行ってきた「窓口指導」、この言葉も聞きなれない言葉かもしれませんが、しかし日本の未来を開く大切な言葉なので、ぜひ覚えてください。

この「お金を創って、市中銀行を通して、どこに分けるか、ということを決める」、**窓口指導**であり、これが中央銀行・日銀の仕事であり、日銀は1991年のバブル崩壊まで、この仕事を積極的に行うことで、実は影から日本を支配していたのです。

バブル創造の秘された真実

経済学者のリチャード・ヴェルナーという方は、『円の支配者』という書籍を書かれて、日銀による影の日本支配について明らかにされました。この書籍について、東京大学経済学部教授の岡崎哲二氏が書評を書かれており、この内容が大変、興味深いのご紹介いたします。



「これは論争の種になりそうな本だが、つぎの理由から本書を推奨したい。日本銀行の歴史については著名な本が何冊もあるが、いずれも1960年代に出版されたものであり、バブル期とそれ以降の経済については書かれていない。『円の支配者』の特徴は、現在の視点で日銀の歴史をとりあげる最初の試みだということである。本書は研究者、実務家双方の大きな関心を引くにちがいない。」

つまり東京大学教授の岡崎氏の書評にもあるように、日銀という日本のお金の発行元について、明確に議論がされてこなければ、日銀について書かれた本さえも60年代から無く、2001年になってようやく『円の

支配者』として、リチャード・ヴェルナーという経済学者が明らかにしてくれたわけです。

この『円の支配者』を読めば、**日銀↓市中銀行(都銀)↓中小企業**という力関係があり、そして80年代から90年代に起こったバブルの生みの親も、その後のバブル崩壊後の大不況の原因も、すべてのすべては日銀にあることが分かります。

では、『円の支配者』には、いかなることが書かれてあるのでしょうか。それぞれの市中銀行は、**日銀の窓口指導**によって自分たちに割り振られた金額を、すべて使い切つて企業に貸し出し、**信用創造**を行わなければ、翌年以降の日銀から割り当てられる**信用創造額**に重くのしかかってくるそうです。そのために80年代、市中銀行は、**日銀の窓口指導**に従つて、とにかく企業に大量のお金を融資して、**信用創造**を行わねばなりません。また企業側も銀行との深い付き合いがあり、関係が悪くなることを恐れて、銀行からの不必要な融資を受け入れて、必要の無いお金を借りる事態となりました。

中には銀行がプロジェクトを計画して、企業に土地を担保にお金を貸し出して、その融資した企業にさらに土地を購入させて、銀行が積極的に新しい事業を後押しす

ることもありました。こうして膨大な量の**信用創造**が行われて、数字上のお金が大量に創られていきました。

その結果、企業をはじめ世の中全体が「**カネあまり状態**」となりました。企業がお金を設備投資などの生産性ある分野に使いきれないと、その余つたお金は、土地と株に流れていきました。こうして不動産会社のみならず、製造業やサービス業を営んでいた会社までが、「**財テク**」と称して、土地や株を購入することで、土地と株の値段が上がりていきました。主婦までが銀行からお金を借りて、「**上がる可能性が高いから**」と上手い話に乗つかつて、株に手を出す事態となつたのです。

そしてその本来の価格とは釣り合わない高額な土地を担保に、さらに銀行が**信用創造**が行い続けて、生みだされたお金によって、また土地と株が買われて、土地と株価格が値上がりしていきました。

こうしてバブルとなり、いつしか「**山の手線内の土地の価格で、アメリカ全土が買える**」、とまで言われるような異常事態となりました。

バブル破壊の秘された真実

しかし1991年になると、日銀は突如、**窓口指導**を

廃止すると共に、各市中銀行に割り当てていた**信用創造**の金額を急激に下げて「**信用収縮**」を行ったのです。

これによって土地の価格は大幅に下落し、バブルが弾きました。すると市中銀行は各企業に対して貸し渋り、貸し剥がしを行ったのです。

「銀行は晴れた日には傘を貸して、雨の日には傘を取り上げる」と、よく言われますが、まさにこれを市中銀行が行ったわけですが、しかしその根本において、実は日銀が急遽、**窓口指導**をやめて、**信用収縮**を行うことによって、市中銀行から傘を取り上げていたのです。

日本は、この戦後最大の大不況によって、何千、何万という会社が倒産し、何百万人という失業者を出し、年間3万人の自殺者の時代を迎えてしまうわけです。

そして『円の支配者』の中で、リチャード・ヴェルナー氏は、「バブルの創造と破壊の真犯人は大蔵省ではなく、日銀である」と明言しており、日銀や市中銀行関係者から多くの証言も取っており、しかもそのバブルの創造と破壊の理論も詳しく説明しているのです。

たしかにバブル崩壊以降、13もあつた都銀は統廃合が繰り返されて、今ではたった4つのメガバンクしかありません。みずほ、三井住友、東京三菱UFJ、りそな

です。しかし市中銀行は、**信用創造**というカタチで、無からボタン一つでお金を創っているために、実は市中銀行は、ある意味において損しないのです。

もし、この『円の支配者』に書かれていることが、デタラメであるならば、日本国民は総力を上げて、日本を経済・金融の面から混乱させるような本を書いたリチャード・ヴェルナー氏を訴えなければなりません、しかしもしもこの本に書かれていることが事実ならば、日本国民は総力をあげて、一刻もはやく日銀に改革を迫らねばなりません。

秘された中央銀行の中央銀行BIS

もう一度、述べますが、日銀こそお金の蛇口です。

しかし90年代、日本の大手マスコミは、バブル不況の原因をすべて大蔵省の責任にして、大蔵省ばかりを叩き続けました。これによって「**構造改革**」と「**金融自由化**」が叫ばれることで、「**金融ビッグバン**」と称して、大蔵省は解体されて、財務省と金融庁となりました。こうしてますます「**日銀の独立性**」が強くなり、日銀は日本政府のコントロール下から、外れていきました。

お金を発行しているのは財務省と日銀であり、硬貨は財務省が、紙幣は民間の中央銀行日銀が発行しています。

つまり厳密に言えば、日本政府は米政府と同様に、通貨発行権を持っていないわけです。そして日銀を統括・管理しているのは、スイスのバーゼルにある央



銀行の中央銀行・BIS（国際決済銀行）です。この銀行も、日銀と同様に、スイス政府とも、国連ともまったく関係の無い、国際銀行家たちによって経営されている民間の銀行なのです。

この国際銀行こそが、米国や日本などの世界各国の中央銀行に対して、準備預金率を義務づけたり、あるいはBIS規制という自己資本比率に規制をかけて、世界各国のお金の根本においてを管理しているわけです。自己資本比率とは、銀行が持っている自分たちで調達したお金と、人々から預金として借りているお金の比率のことです。そしてBISは自分たちの管理下にある世界中の市中銀行に対して、「国際業務を行うには自己資本比率が8%以上でなければならない、国内業務ならば4%以上でなければならない、準備預金率を定めなければならない」などと、色々なルールを決めてこれを守らせることで、自分たちの管理下に置いていっているのです。

副島隆彦著『BIS 国際決済銀行 隠された歴史』によれば、現在のBISには2カ月に1度、世界各国の中央銀行の総裁たちが集まり、高級な食事を楽しみ、完



全に秘密が守られた状態の中で、今後の金融経済の動向について議論を行っているそうです。一見、私たち庶民には何も関係の無さそうに見えるこの議論こそが、実は私たちの日々の暮らしに大きく関与しているわけです。

なぜなら単純に言って、世界各国の通貨発行権を持つ中央銀行も、そして信用創造を行っている市中銀行も、このBISの管理下に置かれているからです。

すでに受けていた金融侵略

アメリカの3代大統領トーマス・ジェファースンは言いました。「銀行は軍隊より危険である。もし民間銀行に通貨発行権が奪われたら、我々の子孫はホームレスになってしまうまで、銀行家たちに利益が吸い上げられてしまうだろう」と。

そのために、アメリカの中央銀行F



R Bの設立に加担してしまつた第28代アメリカ大統領ウッドロー・ウィルソンは晩年、こう発言していたのです。

「私はうっかりして、自分の国を滅亡させてしまいました。」

大きな産業国家は、その国自身のクレジットシステムによつて管理されています。(FRBが設立されたことによつて) 私たちのクレジットシステムは一点に集結しました。

したがつて国家の成長と私たちのすべての活動は、ほんのわずかな人たちの手の中に有ります。私たちは文明開化した世界においての支配された政治、ほとんど完全に管理された最悪の統治の国に陥つたのです。」

このようにアメリカ政府も、お金を発行する魔法の権限を持つてはなく、1913年の時点で、国際銀行家たちによつて金融侵略され、金融的には滅亡していたわけでした。

だからそれから五十年後、1963年6月4日、ケネディ大統領はアメリカを再建しようと、「大統領



領令」を発して、5ドル札・政府紙幣を発行したわけです。するとその五ヶ月後、ダラスにて彼は謎の暗殺に遭い、彼が発行した5ドルの政府紙幣も、すぐさま回収されてしまいました。

実は暗殺されたリンカーンも、「グリーンバックス」というドルを、2年間で当時のお金で450億ドル(約5兆円)発行することで、南北戦争を勝



利に導きました。『中央銀行』と『通貨発行権』、実は政治経済における根幹をなしている部分だったのです。リンカーンは戦争が終わった時、次のように述べています。『お金を発行する特典は、政府のたった一つの特権であるばかりか、政府最大の建設的な機会なのである。』

政府がこの機会を持つことで、人にとってお金が主人ではなくなり、人間が人間らしい生活を送るために、お金が人の召使いになってくれるのである。」

このように『政治』というものを国家の枠組みだけで考えてはならず、国際銀行家・軍産複合体をも考慮して考えなければなりません。軍産複合体とは、軍需産業などの戦争で利益を上げる者たちの総称のことですが、彼



らは中世の頃から、武器商人であると共に世界にまたがる銀行家なのです。

封印されているシカゴプラン

1913年にアメリカの通貨発行権が、国際銀行家たちに奪われてしまつてFRBが設立された時、アメリカの借金はわずか1億ドルでした。しかしそれからわずか8年後には、アメリカ政府の借金は800倍にも増えて、800億ドルに膨れ上がっていました。

なぜ、そんな短期間で借金が膨れ上がったのでしょうか？それは通貨発行権を持たないアメリカ政府が、もしも税収以外にお金が必要になつて、通貨を発行したい場合、通貨の代わりに「**国債**」という利子付きの借金を発行しなければならぬからです。アメリカ政府は、その「**国債・利子付きの借金**」をFRBに買い取ってもらつて、FRBに借金することによつて、「ドル」という通貨を入手しているわけです。

そして通貨発行権が奪われた翌年、1914年より第一次世界大戦が始まり、この大戦が原因でインフレとなりました。インフレとはお金の価値が下がつて、代わりに物価が上がっていくことであり、つまり中央銀行・F

RBが、ジャブジャブと「ドル」を発行して、政府にお金を貸し出すことによつて、アメリカ政府の借金は膨大に膨らんでいったわけです。

そしてその後、アメリカでも、80年代から90年代の**日銀の窓口指導による信用創造**、そして**信用収縮と同様に**、中央銀行・FRBも、「バブルの創造と崩壊」によつて、1929年の「世界恐慌」へと向かつてきました。

そのために世界恐慌当時のシカゴ大学の教授8名が、「**シカゴプラン**」というものを作り、「やはり中央銀行制度はおかしい、通貨発行権を政府に返すべきだ」と、FRBに対して意を唱えました。しかし結局、この「**シカゴプラン**」はタブー視され、リンカーンやケネディと同様に殺されてきました。

通貨発行権が中央銀行に奪われてから、約百年が経過すると、アメリカ政府の借金は、さらに膨れ上がつて、当初の17万倍、17兆ドルにまで膨れ上がっております。しかしレーガン政権で経済顧問をつとめたローレンス・コールドフという方によれば、年金、医療保険制度などの社会保障にかかる『**非公式**』な借金を含めれば、アメリカの借金の総額は211万倍にまで増えて211兆ドルにもなるそうです。現在は230兆ドルに迫り、

これは**2京円**を簡単に超えてしまっています。

つまり民間中央銀行に通貨発行権があることが、そもそも問題だったわけです。そして近年、日本の同志社大学の山口薫元教授も、この「中央銀行制度」に疑問を持ち、そして研究を重ねて、『シカゴプラン』にたどり着き、これを主張し始めると、同志社大学を解雇されてしまったわけです。

ちなみに彼が経済学を学んだノーベル経済学者のジョージ・アーカー・アカロフの妻ジャネット・ルイズ・イエレンはFRB議長です。

まさに借金金融奴隷制度

山口薫元教授の試算によれば、このまま日本政府が通貨発行権を持たない詐欺的な金融システムが続くと、2050年には日本政府の借金は2200兆円になり、2100年には4800兆円を超える天文学的な数字となり、そしてそれに伴って国民を欺き続ければ、税金も上がり続けます。まさにトーマス・ジェファークソンが「我々の子孫はホームレスになってしまう」と予言したように、私たちの孫の世代にはホームレスが溢れかえることでしょう。

しかし山口薫元教授が『公共貨幣』の中でも述べているように、もしも通貨発行権を政府に取り戻して、政府紙幣を発行すれば、今ある1500兆円にもなる日本政府の借金は雪のように消えていくのです。

なぜなら民主主義に基づいて、国民から選ばれ、景気や不況に対して責任を持った政治家が政府紙幣を発行し、そして市中銀行の信用創造を管理・統括すれば、政府は必要な時に必要な分だけお金を創りだせるからです。しかし現状の銀行制度や貨幣制度はそうはなっていない。現在は国民から選ばれたわけではなく、また景気や不況に対して何ら責任を持たない**民間会社の人たちが**、民間紙幣を発行して、そして市中銀行の**信用創造**を管理・統括を行っているわけです。

だからこそ、『フォード・モーター』の創業者ヘンリー・フォードは、皮肉を込めて次のように述べたわけです。
「**国民が銀行制度や貨幣制度を理解していないことは良いことだ。もし国民がそれを理解したら、明日夜が明ける前に革命がおきるだろう**」

「借りる者は貸す人の奴隷となる」、これは『旧約聖書』の言葉です。「奴隷」という言葉は厳しい表現です。しかし政府が通貨発行権を持たず、政府から独立したジャス

ダックにも登録されている民間企業の日銀が通貨発行権を持つてゐることは事実です。そのために、政府の借金は雪だるま式に膨れ上がり、それ伴つて税金も上がり続けています。しかも市中銀行から、個人や企業が利子付きの借金をすることによつて、世の中にお金が生み出されている現在の金融システムは、まさに借金隷制度であつたのです。

それはつまり今現在、日本には中国や北朝鮮の脅威、領土侵略の危機もありますけれども、しかしすでに日本は国際銀行家による金融侵略を受けて、日本人はすでに金融奴隷制度の中で生きていたわけです。

国際銀行家は悪魔教徒

では、日本の中央銀行・日銀、アメリカの中央銀行・FRB、ヨーロッパの中央銀行・ECB、これらの上にある中央銀行の中央銀行であるBIS国際決済銀行、あるいはIMFや世界銀行など、こうした国際的な銀行を営んでいる国際銀行家とは、果たして何者なのでしょうか？

それを読み解くには、『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」を紐解く必要があるのです。

「ヨハネの黙示録」とは、救世主の降臨とハルマゲドンについて記された予言の書です。救世者については次のように記されております。

「全能者にして主なる神が仰せになる、

——わたしはアルファであり、オメガである——（1：8）

足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。（1：13）

右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、強く照り輝く太陽のようであつた。（1：16）

こうした救世主の姿や言葉について記されている「ヨハネの黙示録」ですが、他にも興味深いことが記されております。

「私は、貴方の苦しみと貧しきを知っている。

しかし貴方は実際は富んでいる。

またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえつてサタンの教会にある人たちから、ののしられてゐる事も知っている（2：9）」

ここに興味深い一文が登場します。それは「ユダヤ人を自称しているサタンの教会にいる者」という文章です。つまり黙示録のヨハネは、「悪魔教徒の偽ユダヤ人がある」

と述べているわけです。

今からちょうど500年前、ドイツに現れた英雄に、マルチン・ルターという方がいました。彼はキリスト教カトリック教会と一人に対決し、その後、多くの民衆から支持を得ることによって宗教改革を行い、「プロテスタント」というキリスト教の宗派を創り、ドイツの革命に貢献されました。

その彼が晩年になって対決したのは、実はユダヤ教徒たちでした。なぜならルターは宗教改革を行う際に、『聖書』をより深く学んでみよう」と思い、キリスト教の原型であるユダヤ教の聖典の一つ『タルムード』を紐解いてみたからです。するとなんとそこには「ゴイ」、「ゴイム」という言葉が並んでおりました。これは「家畜」、「家畜ども」という意味です。

つまりユダヤ教徒の聖典『タルムード』には、「ユダヤ教を信じるユダヤ人のみが人間であり、他の人間は家畜であり、ユダヤ人は殺してはいけないが、しかし家畜たち他民族ならば、いくら殺しても構わず、むしろ殺すことは正しいことであり、彼らの富はすべてユダヤ人のも



のである」などと、とても恐ろしいことが書かれてあったわけです。これはユダヤ教の祖モーセの教えから、かなり逸脱している教えです。

こうしたことから、晩年のルター

は『ユダヤ人と彼らの嘘』や『仮面を剥がされたタルムード』といった書籍を出版して、ユダヤ教徒と対決したわけです。もちろんユダヤ教徒のすべてが『タルムート』を勉強しているわけではないので、どうか「ユダヤ差別」はご勘弁ください。

そして国際銀行家は「自分たちはユダヤ人である」と、あえてユダヤ人を自称しておりますが、しかしけつしてユダヤ人ではなく、ユダヤ人を最大限に利用しつつも、そのユダヤ人を迫害してきた者たちなのです。そして「家畜思想」『タルムード』を今から二千年以上前に、ユダヤ人に植え付けた者たち、それが悪魔教徒・国際銀行家なわけです。

私は、経済誌の『日経』や『フォーブス』で記者を務めていたフリージャーナリストの古歩道ベンジャミン氏と対談させていただき、そして彼に聞きました。「BISを営んでいる国際銀行家たちは、果たしていかなる宗教



を信仰している者たちなのか？」と。すると古歩道ベンジャミン氏は「彼らは悪魔ルシファーを信仰しており、ルシファーこそ神だと考えているから厄介だ」と答えました。

世界には、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、あるいは仏教や神道といった、神や仏を信仰する人々が何十億人とおり、世界的に見ると今もまだ無信仰・唯物論の人よりも、神仏への信仰者のほうが圧倒的に多いことは事実です。しかし、おそらくこの大学でも教えられていないでしょうが、実は悪魔教徒という者たちも、かなり昔から存在していたわけです。そして彼らは自分のたちの姿を狡猾に隠して、自分たちの罪や過ちをすべてユダヤ人になすりつけるために、あえてわざわざ「ユダヤ人」を自称しているのです。

それが「ヨハネの黙示録」も登場している「悪魔教徒の国際銀行家たち」です。

今、日本とアメリカの国民が、お金の召し使いにされているのは、**通貨の発行権と管理権**が政府になく、民間の中央銀行にあるからです。そして1790年、ロスチャイルド家の初代であるマイヤー・アムシェル・ロスチャイルドはこう言っていたのです。

「私に一国の**通貨の発行権と管理権**を与えよ。

そうすれば、誰が法律を作ろうと、そんなことはどうでも良い。」



中国・北朝鮮とも関与している！？

ちなみに、北朝鮮の金正恩は、国際銀行家のお膝元であるスイスに留学しており、彼と国際銀行家とは、おそらく何かしらの縁があるでしょう。衛星写真にもありますように、日本、韓国、ロシア、中国といった東アジアの国々は、夜になれば灯りがついているのに、北朝鮮は真っ暗です。普通に考えて、日本の一県レベルしかないGDPで、あれだけのミサイル実験や核実験を行えるその背景には、武器商人兼国際銀行家が絡んでいなければおかしい話です。



日本には今、国防の危機として、中国と北朝鮮があるわけですが、これらの国々と悪魔教徒・国際銀行家はけっして無関係ではないのです。

たとえばユダヤ人のモルデカイ・モーゼという人物が



ある」と述べています。

たとえばこの書籍では「ENOLA GAY」という言葉の意味

エノラゲイ

について、あえてユダヤ人の立場から教えています。広島で原爆を直接落とし、長崎に原爆が落とされる際にも、

天候観測機として作戦に参加している「B29」爆撃機

エノラゲイ

の名前、それが「ENOLA GAY」です。この「ENOLA GAY」という変わった名前は、一般的には、「機長の母親の名前」ということになっていますが、実際は違います。これは

イディッシュ語であり、イディッシュ語とは、現在はあまり使われていないユダヤの言葉です。そしてその意味

は「天皇を屠^{ほぶ}れ」です。

「屠^{ほぶ}れ」、まさにこれは豚や牛などの家畜などに対して使われる言葉であり、タルムード思想に共通性を感じますが、こうしたことをこの『日本人に謝りたい』という

書籍では、わざわざユダヤ人の立場で紹介しているわけです。

書いたとされている『日本人に謝りたい』という書物がありま

す。このユダヤ人を自称している人物は、「日本をことごとく破壊したのは自分たちユダヤ人で

そしてこの書物の中で、「戦後、東京裁判を行い、日本人から愛国心と誇りを奪い取ったのも、日本に今ある憲法9条の問題も、日本人に人生の楽しみをカネだけと思

いこませて、単なるエコノミック・アニマルにして、『人間黙化計画』を行ったのも、さらには日本共産党を育てて流行らせたのも、すべてのすべては、自分たちユダヤ人であった」と主張しています。そしてこの自称ユダヤ人曰く、「ユダヤの理想は、日本にこそ実はあったのであ

って、皇室を始め、教育、思想、文化、日本の良きものすべてのすべてを緻密に、狡猾に、巧妙に、破壊し尽くしてしまったことを、心の底より後悔しているために、ユダヤ人を代表して、自分が日本人に謝りたい」と述べているわけです。

しかしすでに述べたように、「ヨハネの黙示録」では、サタンのシナゴークにいる偽ユダヤ人が登場するように、この自称ユダヤ人は、自分たちの罪をユダヤ人になすりつけるために、わざわざこの書物を書いたと見て良いでしょう。つまりおそらくこの書物は偽書です。

しかしこの偽書は、とても緻密に書かれており、日本を破壊したのはユダヤ人ではありませんが、その破壊の内容にはかなり真実性があります。

15

たとえば北朝鮮と中国の建国の基盤にある共産思想を生みだしたマルクスはユダヤ人であり、人類最初の共産国家ソ連の最高指導者レーニンも、実は熱烈なユダヤ民族主義者でありました。ユダヤ人迫害を行ったスターリンにも、根強いユダヤ人説があり、迫害を受けるのは、いつも、何も知らされていない大多数の人々なのです。

国境と国家を否定する共産思想と同様に、実はユダヤのタルムード思想も国境と国家を否定しているために、ユダヤ人は多国間にまたがって存在しております。そしてソ連が誕生した「ロシア共産革命」とは、実のところ「**ユダヤ革命**」であり、ソ連の中枢は、タルムード主義のユダヤ人によって占められていました。

そして偽書でありながらも、内容には真実性がある『日本人に謝りたい』によれば、共産思想の創設者がユダヤ人のカール・マルクスならば、共産思想の発注者はバリニツシュ・レヴィーというユダヤ人であります。

つまり結論だけ言ってしまうと、共産思想とは、タルムード主義のユダヤ人の発注によって、タルムード主義のユダヤ人の手によって創設された、タルムード主義のユダヤ人のための思想だったのです。

すなわち、非ユダヤ人をゴイ（家畜）と考えて、他民

族には何らの財産を持たせず、ゴイム（家畜ども）には宗教も神仏も与えず、もしも刃向うならば、ためらわずに殺しまくるタルムード思想と、平等を重視するあまり、自ら私有財産を廃止して、支配者層には独裁政治を行わせ、宗教と神仏の存在を否定して、政府に刃向えば粛清される共産思想は、実は一つの思想を、上から観るか下から観るか、その違いでしかなかったわけです。

つまりタルムード思想と共産思想は、一つの同じ思想を「支配者側から観るか、大衆側から観るかの違いではない、選民・家畜思想であった」という驚くべきトリックが、仕掛けられていたわけです。

このように日本には今、国防の危機として、中国と北朝鮮があるわけですが、これらの国々とユダヤ人を自称している悪魔教徒・国際銀行家は、けっして無関係ではないわけです。

アベノミクスのカラクリ！？

1991年に無くなった日銀による市中銀行への「**窓口指導**」、しかし実は今も密にカタチを変えて続いております。それが「アベノミクスのカラクリ」なのです。

安倍・自民党政権は、経済学の「金持ちが豊かになれ

ば貧困層にも恩恵がある」というトリクルダウン説を持ち出して、そして日銀は、「2年間で2パーセントの物価上昇を目指す」として、量的緩和を行ってきました。

この量的緩和によって、毎年約80兆円のお金を創り続けてきましたが、しかし株価は上がっても物価は少しも上がっておらず、国民の暮らしは一向によくなっていません。もちろんこれには、消費増税も関係しておりますが、しかし実は消費増税だけが問題ではないのです。

日銀の量的緩和は、まず日銀が「無」からお金を創り出して、そして市中銀行が持っている国債を買い取り続ける、という形で行われてきました。その他にも日銀は「マイナス金利政策」といって、市中銀行が日銀にお金を預けていたら、かえってその預金が減る政策も行いました。

これらの金融政策によって、日銀から市中銀行に流れた何百兆円のお金が、会社への融資に使われ、**信用創造**が行われて回っていけば、経済が活性化されて物価も上がっていったはずです。

しかし現実にはそうなってはいません。なぜなら市中銀行は、日銀から回ってきたお金を、**融資・信用創造**にはほとんど使わず、株式などの金融市場に使っているか

らです。だから株価は上がり、二万円を超えても経済が停滞しているのです。

しかも『会社四季報』といつて、東洋経済社が年四回発売している日本の上場企業に関するハンドブックを見れば明らかなのですが、実は2007年5月1から施行された「**会社法**」の**改悪以来**、日本の上場企業は軒並み外資に買収されております。つまり日本の上企業株を持っているのは実は外資なのです。

では、なぜ市中銀行は、日銀から回ってきたお金を、株式市場ばかりに回しているのかと言えば、実は今やみずほ、東京三菱UFJ、三井住友、りそなといった日本の4大メガバンクも、すべて外資だからです。これら4大メガバンクの株主一覧を見ると、「バンガードグループ」、「ステート・ストリート」、「ブラック・ロック」、「ニューヨークメロン銀行」、「JPMorgan・チェース」といった外資の名前ばかりが並んでいます。たしかに4大メガバンクの株主のなかには、「日本マスタートラスト」、「日本トラステイ・サービス」といった「日本」という名前がつく企業も並んでいるのですが、しかしこれらの企業も、表向きは日本の年金や生保の資産運用会社とされてはいるものの、しかしその実態は、前身が「チェ

ースマンハッタン信託銀行」であって、やはり結局は外資です。

つまり日銀が量的緩和によって何百兆円も創造したお金は、結局は外資が株主の市中銀行に回って、市中銀行は、そのお金を中小企業に融資・**信用創造**はせず、株にばかり投資しているわけです。しかも2007年5月の**会社法改悪以降**、日本の上場企業もすでに外資に買い漁られています。そのために、たとえ株価は二万円を超えても、庶民の暮らしにはほとんど影響は出ておらず、2%の物価上昇さえ起きていないわけです。

もしも市中銀行から企業等へお金が貸し出され、きちんと**信用創造**が行われて、本当にお金が大量に生み出されれば、経済が活性化され、人々の暮らしが良くなります。そうなれば自然と物価も上がって、それに伴って株価も上がることでしょう。しかしただ銀行が金融市場・株にばかり投資して、株価だけがあがっているために、庶民の暮らしには影響がないのです。

誰もが「毎年80兆円ものお金を創っているならば、いくら消費税を増税したからといって、もう少し庶民にお金が回ってきても不思議ではないのにおかしい」と、そう感じることでしょう。しかしアベノミクスの本当の

カラクリは、リチャード・ヴェルナー氏や山口薫氏などが述べている、**通貨発行権と信用創造**という現経済学にはまだない未知の領域を踏み込んで、そして「本当に銀行がお金を生み出しているかどうか?」、ということを緻密に見ていかないと見えて来ないのである。

今の不況の真相を探る

今、日本人の大半が、「政府も、日銀も、必死になつて景気対策をやってくれているのだから景気が上向かないのも仕方がない」と、そう思っているかもしれません。しかしアベノミクスのカラクリを見ていくと、「政府や日銀は本気で景気対策をやる気があるのか?」と思えてくることでしょう。

はっきり言つて、政府も日銀も景気対策をやる気がないといしか言いようがありません。その極めつけの一つが、国民を欺いている「**マイナス金利**」です。

なぜなら市中銀行は、当座預金といつて、日銀（銀行の銀行）にお金を預けており、そのお金を銀行が引き出



して、世の中に回して、**信用創造**を行わせるために、マイナス金利にしました。つまり、「市中銀行が日銀にお金を預けていたら、そのお金が減ることになった」と、一般の通説として言われているわけです。おそらく多くの日本国民が、「今、マイナス金利になったらか、銀行が日銀に預けていると、そのお金は減っていくんだ」と騙されているはずです。

しかし実はそのマイナス金利の対象も、実はほんのごく一部でしかないのです。つまり今でも変わらずに、市中銀行は日銀にお金を預けていれば0.1%の利息がもらえて、その額は年間約2200億円にも上ります。日銀が銀行に何百兆円というお金をあげて、そのお金を日銀に預けていたら、利子で2200億円ももらえてしまう、まさにこれは「日銀から市中銀行へのお小遣いではないか？」と言われているわけです。**アベノミクスの量的緩和や日銀のマイナス金利政策**について、緻密に見ていくと、日銀から市中銀行へのお小遣いのめくらしに、「マイナス金利」が行われているようにさえ見え始めるわけです。

すなわち、アベノミクスや日銀の「量的緩和」や「マイナス金利」といった金融政策は経済を少しも活性化さ

せてはなく、期待もできないわけです。

しかもバブルの頃の話にもあったように、中央銀行・日銀は、市中銀行に対して、かなり大きな力を持つており、信用創造を管理統括しております。ですからこれだけの不況期ならば、日銀は窓口指導を行って、市中銀行に**信用創造**を促そうと思えば行える立場にあります。市中銀行を通じて、無からお金を創りだして、日本の経済を活性化させることも日銀には可能なのです。

経済学を勉強して経済は分らない

NGO団体の『オックスフアム』は、2017年1月の報告書『99%のための経済』において、次のように記しております。

「富める者と貧しい者の格差は、これまで考えられていたよりも遥かに大きく、世界で最も豊かなわずか8人が世界の貧しい半分の36億人に匹敵する資産を所有しており、**1%の人々のために今の経済は存在している。**

だから世界は今、(残りの)99%のための経済を必要としており、経済を私たちの手に取り戻し、人間らしい経済を実現しなければならない。」

NGO団体『オックスフアム』が述べる、「1%のため

の経済から、99%のための経済へと変えていかなければならない」という主張、この主張は中央銀行と通貨発行権、市中銀行と信用創造について考えてくると歴然です。経済学そのものを、創り変えていかなければならないのです。



たとえばジョン・クイギンという経済学者も、『ゾンビ経済学死に損ないの5つの経済思想』という書籍を書かれて、「経済学ではすでに破綻した思想や理論が、破綻したあとともまるでゾンビのごとく復活し、幅をきかせている。すでに多くの経済理論が世界金融危機のなかで、正当性を否定されたはずなのに、未だゾンビのごとく跋扈しており、経済理論を生みだす妨げとなっている」と主張しております。

すでに紹介した『日本人に謝りたい』は、内容には「日本破壊」「^{エノラ}ENOLA GAY^{ゲイ}」「共産思想」など、真実性があるものの、しかし偽ユダヤ人が書いた偽書である可能性が高いわけですが、これと同様という、やはり偽ユダヤ人が書いたとされている書物があります。この書物は、フォードの創業者のヘンリー・フォードがわざわざ出版



「経済学という偽の学問をひろげ、銀行家や資本家も含めて彼らが悪いことをやっているように見せかけ、経済学の裏にユダヤ人がいることを気づかせないようにする。」

経済学という偽の学問を広めて真犯人を分からなくさせる、まさにこれは、これまでこの冊子の中で述べてきたことを考えると、その通りになっていると言えます。

なぜなら現在の経済学では、通貨発行権や信用創造といった銀行業務については何も触れず、そもそも「お金とは何か？」ということ、さらには「シカゴプラン」をタブー視しており、そしてその銀行の背後にいる偽ユダヤ人悪魔教徒の存在など、微塵も考えることがないからです。

それはつまり、アダム・スミス以来の250年の経済学は、経済の根幹部分から話を逸らしたまま、経済についてあれこれ議論してきたわけです。

そのために厳しい表現をするならば、「現在の経済をいくら勉強しても、経済の本質までは少しも分らない」ということが言えてしまうわけです。

トランプ革命の本当の意味

民間の中央銀行に通貨発行権があり、しかも通貨発行権の大本である国際銀行家たちが悪魔ルシファーを崇拜している、まさにこれは危険そのものです。

しかし2107年、トランプ革命が始まりました。ドナルド・トランプの大統領選挙の勝利、これはまさに「トランプ革命」だったのです。アメリカ大統領の中で、はじめて暗殺未遂に遭った7代大統領アンドリュー・ジャクソン、彼は当時の中央銀行の免許更新を拒否して、銀行を破産に追い込もうとします。その彼が述べました。

「銀行は私を殺したいだろうが、私が銀行を殺す。

お前たちは腹黒い盗人の巢窟だ。

私達はお前たちを一掃する。永遠なる神の力によって、お前たちを必ず一掃する。」

銀行に殺されそうにながらも、「銀行を殺す」と述べて、銀行家たちを破産に追い込もうとしたアンドリュー・ジャクソン大統領、そしてトランプは大統領に就任

してホワイトハウスに入ると、彼の肖像画を飾ったのです。

トランプ革命の本当の意味、それは「1%VS99%の対決」における99%の大衆側の勝利だったのです。それはトランプ大統領の就任演説に目を向けると分かります。それではトランプの就任演説の一部を、ご紹介したいと思います。

「あまりにも長い間、ワシントンにいる一部の人たちが、政府から利益や恩恵を受けてきました。その代償を払ったのは国民です。ワシントンは繁栄しましたが、国民はその富を共有できませんでした。政治家は潤いましたが、職は失われ、工場は閉鎖されました。権力層は自分たちを守りましたが、アメリカ市民を守りませんでした。彼らの勝利は、皆さんの勝利ではありませんでした。彼らは首都ワシントンで祝福しましたが、アメリカ全土で苦しんでいる家族への祝福は、ほとんどありませんでした。【中略】

私は全力で皆さんのために戦います。決して失望させません。アメリカは再び勝利します。これまでにない勝



利です。雇用を取り戻し、国境を回復し、富を取り戻し、そして、夢を取り戻します。アメリカを再び偉大な国にします。ありがとうございます。皆さんに神の祝福がありますように。そして、アメリカに神の祝福がありますように。ありがとうございます。アメリカに神の祝福あれ。」

演説にはこうあります。「権力層は自分たちを守りましたが、アメリカ市民を守りませんでした。彼らの勝利は、皆さんの勝利ではありませんでした。」

この「^{エスタブリッシュメント} establishment（権力層）」こそ、＼1%の超巨大な大企業＼であり、彼らを「グローバルリスト」と呼び、彼らは国際銀行家・軍産複合体であり、まさにトランプの勝利は＼99%の大衆＼の勝利であつたのです。しかし1%のエスタブリッシュ（権力者）側は、お金によってテレビや新聞といったマスコミの株主や広告主になることで、日米のみならず世界のマスコミに対して、今も強い影響力を持っております。そのために、「トランプ叩き」と「反トランプ洗脳」が世界中で根強く続いているわけです。

トランプ革命は今なお進行中ではありますが、この革命の本当の意味、それは「銀行を殺す」と述べたアンドリ

ュー・ジャクソンの肖像画を、トランプが飾ったことを見ても分かるように、今後、中央銀行FRBに対してこそ行われていくのです。

国際銀行家はユダヤ人ではなく、ユダヤ人を自称する悪魔教徒であります。真相は定かではありませんが私の情報筋によれば、表向きには発表されていないものの、現FRB議長のジャネット・イエレンや前議長のベン・バーナンキといったユダヤ人を語っている者たちなどはすでにFRBから一掃された、という情報も入ってきております。

政府紙幣は夢のような暮らしを実現する

マスコミによって、トランプやプーチンと共に独裁者に仕立て上げられてきたリビアのカダフィー、実は彼こそ、国際銀行家から通貨発行権を護り抜き、自国で採れる石油を自国民のために使うことで、夢のような豊かな暮らしを実現させました。では、カダフィーによって実現されたリビアの夢のような豊かな暮らしとは、はたしてどんなものだったのでしょうか。

1. 電気代の請求書が存在しない。電気は全国民、無料。
2. 融資には金利がなく銀行は国営で、全国民に対して与えら

れる融資は、法律で金利ゼロ・パーセント。

3. 住宅を所有することが人権と見なされている。

4. 全て（違うという意見もあり）の新婚夫婦が、新家族の門出を支援するため、最初のアパート購入用に政府から 60,000 ディナール (50,000 ドル × @80 円/\$ → 500 万円) を受け取る。

5. 教育と医療は無償。識字率は 83 パーセント。

6. 農園を始めるための、農地、家、器具、種、家畜が、全て無料で与えられる。

7. 政府が外国に行くための資金を支払い、さらには実費のみならず、住宅費と自動車の経費として 2,300 ドル (23 万円) / 月、支払われる。

8. 自動車を購入すると政府が価格の 50 パーセントの補助金を出す。

9. 石油価格は、リッターあたり、0.14 ドル (約 14 円)。

10. 対外債務は無く、資産は 1500 億ドルにのぼる。

11. 卒業後就職できない場合は、本人が雇用されているかのごとく、特定職業の平均給与を、職が見つかるまで国が支払う。

12. 石油のあらゆる売上の一部が国民の銀行口座に直接振り込まれている。

13. 子供を生んだ母親は、5,000 ドル支払われる。

14. パン 40 斤が 0.15 ドル (10 円ほど)。

15. (国民の) 85 パーセントが大学の学位を持っている。

16. 人工河川計画として知られる世界最大の灌漑プロジェクトを 26 年かけて遂行した

リビアの人々がかつて言いました。「リビアは日本より貧しいが、リビア人は日本人よりも豊かである」と。それは通貨発行権が民間銀行ではなく、リビア政府にあったからです。もしも通貨発行権を民間中央銀行から政府に取り戻して、政府紙幣を発行することができれば、人々の悩みや問題は、「どうやってお金を稼ぐか」から、「どうやって時間を使うか」という、より高次元なものへと自然と変っていくのです。

そしてそれは、百年ほど昔の 1930 年、経済学者ジョン・ケインズも予言していたことだったのです。

「およそ百年後には、ほとんどの経済的問題は解決されてしまい、人々の悩みは余暇をどのように使うか、ということになるだろう。」 『孫の世代の経済的可能性』

3 代大統領トーマス・ジェファースンが「銀行は軍隊より危険であり、通貨発行権を民間に銀行に奪われたら」と述べていたように、ケインズを始めとする経済学者たちは、おそらく銀行家たちの経済のカラクリを知っていたのでしょう。ゆえに彼は「百年後には経済的問題は解

決している」と述べたのでしょう。そしてケインズが述べたように、もしも実際に、通貨発行権を日銀から日本政府に取り戻せば、日本はリビア以上の夢のような豊かな暮らしを実現することができるのです。

しかしリビアのカダフィーは、国際銀行家たちの前に敗れ、トランプ革命以前の米国によって、リビアの街は爆撃され、リビアの人々の暮らしは原始時代の暮らしに逆戻りさせられてしまいました。

目覚めの時は今

アダム・スミス以降、国家の政策にまで影響を及ぼしてきた経済学ですが、しかしその経済学は、経済の本質である「経世済民」^{けいせいさいじん}、「世を経めて民を済う」^{よき}ということが多すぎてきていませんでした。ならばこそ新たな経済学を打ち立てねばなりません。世の中に革命をもたらしていかねばならないのです。

そして新たな経済学を打ち立て、世に革命を起すために行かねばならないこととして、ヘンリー・フォードが皮肉を込めて「国民が銀行制度や貨幣制度を理解していないことは良いことだ。もし国民がそれを理解したら、明日夜が明ける前に革命がおきるだろう」と述べたよう

に、現在の詐欺的な銀行システムを国民に知らせて、この詐欺を白日のもとに晒さねばなりません。

なぜなら富を盗まれ続ける金融奴隷、それが私であり、貴方であり、日本人だからです。しかし「奴隷」ならばまだ良いほうであつて、ユダヤ教徒たちに、家畜思想『タルムード』を植え付けたことから分かるように、ユダヤ人を自称している悪魔教徒・国際銀行家たちは、私たちのことを「家畜」と考えています。あるいは「シープル」と考えています。シープル (Sheep) とは、英語の羊「sheep」と、人々の「people」を組み合わせた造語ですが、金融詐欺を行っている者たちにとって、私たちはずっと眠り続けていてもらいたい、単なる羊（家畜）なのです。

そして実際に私たちは目の前の、手の平の中で行われている金融詐欺に少しも気づかず、今もなお眠り続けたままです。

そのために今現在の日本は、多くの人がお金で悩まされている状況にあります。しかしこの金融詐欺を乗り越えさえすれば、「いかに余暇を使うか」ということにこそ、頭を悩ませる黄金の時代が訪れます。

ならば答えはたった一つです。羊をやめることです。

眠ることをやめることです。立ち上がることです。

眠ることをやめて、立ち上がるために大切なこと、それは「怒り」です。その怒りは自分のための私情の怒り・私憤ではなく、公の怒り・公憤であり、また人間としての尊厳に基づく怒りです。

かつてキング牧師たちが人種差別と戦い、公民権運動を行っていた時、黒人たちは「自分たちだって同じ人間だ!」という人間としての尊厳に基づく怒りがあり、また黒人にも白人にも、愛する祖国アメリカに対して、「正義の国であるべきアメリカが、人種差別というこんな不正義を許しているのか?」という怒りがありました。その怒りはまさに非暴力であり、公憤だったので。

このように、いつの時代でも、世を素晴らしく変えていくためには、こうした暴力を伴わない公憤が必要不可欠です。ですから今ある金融借金奴隷制度を破壊して、豊かな時代を実現していく原動力として、やはり同じく人間の尊厳としての怒り、公憤が求められていると思います。公憤こそ、眠り続ける羊・シールプである私たちが今、非暴力革命を起こしていくために、最も必要な心とと言えるでしょう。

そして公憤を呼びこしていくためにも、ヘンリー・フオードが述べたように、今ある銀行制度と貨幣制度の事実を国民の間に広めていく必要があるのです。

2018年こそ重要な年

いや、「もう時間がない」というのが現実です。悪魔教徒偽ユダヤ人の存在とハルマゲドンと救世主降臨を記した『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」ですが、今、世界中で「死海文書」が話題を集めております。「死海文書」とは、1947年にイスラエル近くにある死海のほとりの洞窟から出土した『旧約聖書』の文書のことです。この「死海文書」は二千年以上の長きに渡って、人目につくことなく、洞窟の中でひっそり眠り続けてきたのです。

この「死海文書」の中には、預言者ダニエルが書いたとされる「ダニエル書」というものがあり、預言者ダニエルは、預言者エレミヤという方の言葉を引き合いに出しながら、「再建された聖都エルサレムの荒廃が七十年に渡って続く」と述べています。実際に今、ユダヤ教、キ



リスト教、イスラム教の宗教間の対立によって、イスラエルおよび中東地域には、大変な荒廃があります。

そして1948年に、約2000年ぶりに流浪の民、ユダヤ人たちは約束の地シオンに帰還して、ユダヤ国家・イスラエルの建国しました。『旧約聖書』の預言通り、彼らはイスラエルを再建したわけです。

そしてエレミヤやダニエルの予言が正しければ、この1948年から七十年が経過した2018年、ついに中東とイスラエルの荒廃はクライマックスを迎えるわけです。それはハルマゲドン、人類破滅の大戦争が勃発すること十分に予測できます。

ユダヤ教徒の悲願は三つあります。一つはイスラエルの建国であり、これは達成されました。もう一つはエルサレムにソロモン神殿を再び建設することです。そのため彼らは、ソロモン神殿の遺跡とされている**嘆きの壁**の前にて、神殿建設を願っているわけです。

しかし現在、ユダヤ教のソロモン神殿があつたシオンの丘およびエルサレムは占領地区で、そこにはイスラム教の寺院である岩のドームが建っています。

なぜならユダヤ教、キリスト教、イスラム教の3つの宗教の聖地であるエルサレムは特別な地域のために、正

式にはイスラエルの領土として国際的に認めてはいないからです。これが、ユダヤ教徒たちがエルサレムにソロモン神殿を建てたくても、建てられない理由なのです。

しかしユダヤ人にとって聖都が回復されるとは、ソロモン神殿が再建されることを意味しており、そしてもしもシオンの丘にソロモン神殿が再建されれば、イスラム教の聖地・岩のドームは破壊されることになります。そしてもしもそんなことになれば、世界中のイスラム教徒たちが怒りの声をあげることでしょう。これによって第5次中東戦争が勃発すれば、アメリカをはじめ世界中の国々が巻き込まれて、世界は破滅しかねません。

これまでアメリカは、常にイスラエル寄りの発言を繰り返してきましたが、トランプ大統領は、もっと積極的であり、彼は現在、テルアビブにあるアメリカ大使館をエルサレムに移すと公言しております。これが何を意味するのかと言えば、イスラエルの首都は、あくまでもテルアビブではなく、エルサレムだと主張しているわけです。もしもアメリカが大使館をエルサレムに移すとすれば、ユダヤ教徒の悲願であるエルサレムにソロモン神殿を建立することを、アメリカが追認することになります。

もしもアメリカ大使館がエルサレムに移り、そしてイ

スラム教の聖地岩のドームが壊されて、ソロモン神殿が建設されたら、ただでさえ反米意識が高い中東のイスラム教徒たちは、猛反発することでしょう。まさに「神のために努力する」という意味の「ジハード」によって、ハルマゲドンが起こりかねません。このようにトランプ革命によって変化しつつある世界ですが、まさに今、世界は「死海文書」が告げる終末に突入しているわけです。

しかし希望もあります。「死海文書」では、「ヨハネの黙示録」と同様に、救世主の出現も予言しているのです。

ユダヤ人の悲願、それはイスラエル建国であり、ソロモン神殿の建立であり、そして三つ目は救世主の降臨なのです。

そして「救世主は日本人かもしれない」と、かねてより言われてきたことなのです。なぜなら「ユダヤ人と日本人は同じ祖先である」という日ユ同祖論というものがあり、日本人とユダヤ人には多くの共通性もあるからです。

「死海文書」には「戦いの書」というものがあり、その書の中では、「人類は光の子と闇の子の最終戦争が起こり、世界は大厄災に見舞われ、その時に救世主が現れる」とあります。

まさに悪魔教徒・国際銀行家との戦いは始まっており、これはまさに**光と闇の戦い**であり、**神仏と悪魔の戦い**でもあります。そしてこれまでは、悪魔が通貨発行権を持ち、信用創造に統制をかけて管理して、経済学では通貨発行権や信用創造をスルーしてきました。

ならばこそ私たち人類は、この光と闇の戦いに勝利して、神の経済学を打ち立てて、神への信仰における信用創造を行っていかねばなりません。

今こそ日本人をはじめとする世界人類は、この光と闇の戦いに終止符を打って、このハルマゲドンをこれ以上拡大させず、地球を死の星にさせないためにも、神仏の勢力に入るべきなのです。

参考書籍

- ・『公共貨幣』山口薫
- ・『円の支配者』リチャード・ヴェルナー
- ・『B I S 国際決済銀行隠された歴史』
副島隆彦
- ・『新約聖書』
- ・『ユダヤ人と彼らの嘘』
仮面を剥がされたタルムード』
マルチン・ルター
- ・『日本人に謝りたい』モルデカイ・モーゼ
- ・『ゾンビ経済学』
死に損ないの5つの経済思想』
ジョン・クイギン
- ・『シオンの議定書』
- ・『死海文書』
- ・『旧約聖書』

